



インドネシア

BOP層実態調査レポート

概要

都市化と工業化の進行とともに、インドネシアのゴミ問題は深刻さを増している。中央統計庁によると、2011年時点で、インドネシア全国の380都市から1日当たり平均8万トンのゴミが出されている。ちなみに、ジャカルタでは1日当たり約6,500トンのゴミが出される。しかし、ゴミの量の増加もさることながら、ゴミの捨て方やゴミ収集システムの不備が大きな問題となり、2011年1月17日のジャカルタ大洪水でも、排水溝に溜まったゴミが排水に支障を及ぼす事態となった。川に捨てられるゴミは、通常の家計ゴミに加えて、ソファやバイクなどの粗大ゴミも散見されるほどである。

住宅は通常、ゴミ箱を完備しておらず、穴を掘って埋めるということも一般的ではない。実際、場所によっては集落の目立たないところにゴミが無秩序に投棄されている。ゴミのポイ捨てについては、南スラウェシ州マカッサル市のように、地方政令で指定場所以外へのゴミ捨てを禁止し、「違反者がいた場合には、写真等をつけて通報せよ」と呼びかける自治体も増えてきた。しかし、高級車の窓から道路にゴミを捨てたり、集会などの後はゴミの山になったり、状況が改善されている気配はない。しかも、筆者がそうしたゴミを拾おうとすると、「清掃夫がいるからゴミを拾う必要はない」と止められる始末である。清掃夫の雇用機会を奪うことになるというのが理由である。



収集されたゴミの山



ゴミ収集用のリヤカー

ゴミ収集については、インドネシアには、日本のようにゴミ収集車が定期的に地域を回って収集する仕組みはない。それでも時折、こぼれ落ちそうなくらい、うず高くゴミを積んだ古ぼけたトラックや、リヤカーを引いたり、大きい袋を持ったりして歩く廃品回収業者の姿を見かける。ジャカルタの大きな家にはゴミ出し口があり、そこに廃品回収業者が立ち寄って、勝手に必要なゴミを持ち去っていく。ゴミ出し口のゴミは分別されておらず、雑多なゴミが混在したままである。



筆者が話を聞いたゴミ回収業者のウスマン氏とアドン氏は、タムリン通りに面した商業ビルの裏側にあるゴミ・廃棄物の置き場へ毎日やって来る。彼らが回収するのは、段ボール、ペットボトルなどであり、それらを1キロ1,200ルピアで買い取る。買い取った廃棄物は彼らの元締めのところへ運ばれ、元締めが1キロ1,500ルピアで買い上げてくれる。この価格は市場価格に連動し、頻繁に上下する。彼らは南スマトラ州パレンバンの出身で、ジャカルタへ出稼ぎに来てそのまま廃品回収業に従事して居着いた。若いアドン氏はウスマン氏にくっついて見習い、といった趣である。

インドネシアでは、消費財のほとんどがジャワ島で生産され、それが全国津々浦々まで運ばれていく。そして、各地でペットボトルが捨てられ、廃品回収業者がそれを回収して、再びジャワ島へ送り返される。ペットボトルの再処理工場がジャワ島にしかないからである。リサイクルされるゴミは、ジャワ島から出ても必ずジャワ島へ戻ってくるから、それを介在するリサイクル業者や廃品回収業者の仕事がなくなることはない。



段ボールを収集するアドン氏

所感

政府は、家庭ゴミまたは同類に関する政令2012年第81号を公布し、飲食品会社に対して、グリーンパッケージの認証を受けた素材による容器を使うことや、向こう10年間の製品容器のゴミ処理プログラムの策定が義務化されている。スーパーのポリ袋に自然分解するプラスチックを使うなど、インドネシアでも急速に、ゴミ処理における環境が大きく変化し始めた。一部のビルや官公庁では、ゴミの分別も試みられている。

しかし、国民のゴミ捨てマナーは依然として改善されたとは言い難い。増え続けるゴミの処理需要に対して、政府はゴミ発電などの新たな取り組みを試みようとしている。

ゴミ回収業者は、すでに元締めから末端まで組織化されており、各都市の隅々までそのネットワークが張り巡らされている感がある。インドネシアでは日本のような行政によるゴミ収集は根付かず、ゴミ回収業者のネットワークが活用され続けていくことであろう。

JETRO

【免責事項】本レポートで提供している情報は、ご利用される方のご判断・責任においてご使用ください。ジェトロでは、できるだけ正確な情報の提供を心掛けておりますが、本レポートで提供した内容に関連して、ご利用される方が不利益等を被る事態が生じたとしても、ジェトロ及び執筆者は一切の責任を負いかねますので、ご了承ください。